



搾り取られ専門サークル
: drain

勇者は決して逃れられない!

第1章

―人間世界に勇者タルスあり―

魔界の神ニニとメメの耳にも、その噂は入ってきた。

配下の忍び曰く『屈強な肉体と多大な魔力を持ち合わせ、誠意と周囲に対する心配りに満ちた男である』とのこと。

事実、人間世界に送り込んだ魔王たちはいずれも音信不通となった。

人間ごときに狩られるはずのない、あの邪悪な魔王たちが全滅したともなれば、次は自分たちだろう。

勇者が魔界と人間界の間にある大海を越えて来るのも、そう遠い日ではあるまい。

「どおする〜？ ニニイ」

「ヤヴあい。・・・絶対にヤヴあい！」

「魔王ちゃんたち、全滅だつて〜」

「んがあ〜っ！！！！」

「頭掻きむしっても、どうしようもないよ〜？」

「だいたいなんでそんなに強いんだよっ！ 人間だろ？」

只の人間なんだろ？」

「でもさ〜、忍びの言い分が正しいなら『誠意と心配り』があるんでしょ？」

「そんなもん、強さには関係ないだろ？」

弱点探してこいよ！

ダメ忍びっ！」

「いや〜、結構良い線行つてると思うよ？」

「・・・？」

『『誠意と心配り』の勇者なんでしょ？

人質とつて畏に、・・・嵌めちゃおうよ♪』

「む〜。真つ向勝負でも負けないと思うけど・・・命あつてのモノダネ。

背に腹はかえられない・・・か」

「でしょ♪でしょ♪」

「なんでそんなに楽しそうなんだよ！？」

こっちの命がかかってんだぞ？」

「だつて〜、強いってことは・・・精液も濃いつてことだもん♥」

「あつ・・・そつつかああ・・・！」

おっし！！！！！！

急にやる気出てきたわ！

オケツに要らさずんば、コジも得ず！」

「虎穴に入らずんば、虎子も得ずよ・・・ニニ」

―魔界に『神』と謳われし、二人の大魔王あり―

人間界では常に魔界の脅威に怯え、その圧倒的暴力の前に人々はひれ伏していた。タルスとアーリアの二人が現れるまでは……。

勇者タルス。

人間界最強の勇者。

元はパワー型の戦士でありながら、魔法も使いこなし、タルス単独であっても一国を支配していた魔王軍を全滅させたことから、『殲滅の勇者』と呼ばれている。

そして彼のフィアンセであり、相棒のアーリア。

人間界最高の賢者。

元は女僧侶であったが、タルスと旅を共にすることで成長し、攻撃魔法・治療魔法・支援魔法と人間が扱える魔法をほぼ全て使いこなすことから『賢者』と呼ばれるまでに登りつめた。

元々アーリアは地方の村の、ゴロツキ。いわゆるヤンキー女であったが、タルスに出会って改心し、今ではタルスを心から想う押しかけ女房となった。

無理やり旅に同行されて、タルスも最初は迷惑に思っていたが、共に苦難を乗り越えた今では深く信頼し、安心して背中を預けている。

二人は人間界のあちこちで陵辱の限りを尽くす魔王たちを一人ずつ倒していった。そして、ついに人間界にいた最後の魔王メルクーザも、打ち倒すことに成功した。残るは魔界に乗り込んでの、大魔王討伐である。

魔王メルクーザを打ち倒した晩、タルスとアーリアは地元の国王の招きで晩餐会に参加し、酔ったままベッドに二人揃って潜り込んだ。

「久々のベッドだね。タルス君。

ね？

H……する？」

「うわふぁ……もう酔って……出来ないよ。

また今度お……」

「もう！

そう言っただけなのに、いっつってもHしてくれないんだから！

こんなふかふかのベッドで、しかも真っ白シートだよ？

Hするならいつ？

今でしょ！」

「・・・むりい・・・。今日は寝るう・・・」

「私、野っ原でHするのは嫌だよ？」

「こう・・・ロマンチックに・・・って、おいっ！寝るの早っ！」

「・・・ぐう」

アーリアは口を尖らせながら、ため息を一つ。しかし、すぐに慈しむような穏やかな顔になり、タルスの頬を撫でて、微笑んだ。

「メルクーザ討伐、お疲れ様♥

これで人間界の魔王は皆やつつけちゃったね。

頑張ったね、タルス♥

アーリアは自慢の長い緑色の髪をシーツの上で焔めかせながら、眠るタルスの額にキスをして、彼の横に寝転んだ。

「あくもく、食べたばかりで寝ると太るよなあ〜。

タルスは、お腹ポッコリ賢者でも愛してくれるかな〜」

アーリアは窓の外に視線を向けながら、そんなひとりごとを呟いて瞳を閉じた。

しかし、その瞬間っ！

窓から違和感が流れ込み、二人を包む！

アーリアは耳に「クスクス」と笑う女の子の声を聞いたが、瞳が開けられない。それどころか、全身が硬直したままで動けない！

「(タルス・・・っ！

起きて！

起きて、タルスっ！

敵襲よ！」

そう念じた頃には、アーリアの意識は別空間に閉じ込められてしまった。

「はじめまして。

賢者アーリアさん。

ちよつとの間、お付き合いいただきますよ？」

「メメ、さっさと殺しちやおうぜ。」

女に用は無し！

精液が出ないからなっ！

「ダメよ。ニニ。」

この人は後々、タルスさんをたぶらかすのに使うんだから」

「・・・人質ってこと？」

アリアが言葉を発せられることに驚いたのか、二人の女の子は目を丸くした。

「すっつごうくうい!!!」

私の空間で、おしゃべりできるぐらいの賢者だく！

うん、これは洗脳し甲斐がありそく♪」

「メメ、本当に大丈夫なんだろうな。」

話せるなんて聞いてないぞ？」

メメの顔が一瞬曇る。

ニニの言葉は、メメの誇りである魔法において『相手はお前より格上なんじゃないか？』と聞かれたことと同義だからだ。

しかしメメはニッコリ微笑んで言った。

「大丈夫♪」

意識だけを此処に呼んだから。

身体はしっかり閉じ込めてあるし♪」

「・・・分かった。信用する」

「現実世界のアリアさんの身体。」

一応、縛り付けておく？」

「そうだな。お前はやるなよ？」

念の為、モンスターにやらせよう」

「ニニって意外と用心深いよね」

「(ニニ？　メメ？」

間違いない。大魔王の名前だわ。

ということ、私は大魔王に捕まってしまったの？

でもここ、意識空間よね？

ってことは意識だけが此処に来ていて、身体は別の場所にあるってこと？」

「クスクス。」

先に言っておきますが、ここからは出られませんよ？

私が貴方を外に出そうと思わない限りね。

あ、自己紹介しなくっちゃ！

はじめまして。

魔界を統べる大魔王の一人。

メメと申します。

今日からここで貴方のことを、洗脳します。

宜しく♥

「ニニだ！」

同じく魔界を統べるもう一人の大魔王にして、お前のご主人様だ。

あ、ご主人様って言ってもアタシは女だからな！

それと、アタシの好みは、精液が濃くて感じやすい男だけ！

お前は要らないんだぞ？

その辺、わきまえろよ」

「………大……魔王……」

でも………なんで………此処は人間界………」

表情にこそ出さなかったが、(人間とはいえ流石は『賢者』だな)と、二人の大魔王は感心した。

魔王はともかく大魔王が魔界を出た記録はこの3千年ほど、無い。

それを利用して『大魔王は魔界を出られない理由がある』と偽情報を流したのが数百年前の話だ。

「(あんな昔の話、私たちでも忘れていたのに。

そんなことまで知識として蓄えてあるのね)」

「んじゃ、メメ。行こっか」

「うん♪ 待っててね。私の勇者さま♥」

「久々の大物だ、たらふく搾るぞ〜っ♪♪♪」

「待って！」

「待ちなさいっ!!!」

ニニとメメはアーリアの意識を空間に放置したまま、霧となって消えてしまった。
ここでアーリアは強い疑念を持った。

「(なぜ、私を放置したの？ 此処に閉じ込めておける絶対的な自信があったから？
違う。」

意識隔離なら人間界でも比較的ポピュラーな拘束魔法。

私なら解除できる・・・っ！

それをあの二人は分かっているで放置した。

解除すると何かのトラップが発動する？

それなら理解できるわ。

自分たちまでトラップに巻き込まれないように、先に脱出したのね。

ならまずトラップから解除しないと・・・」

「クスクス。

おい見ろよ、メメ。

やっぱあの賢者・・・トラップを探し始めたぞ（笑）」

「まあそのくらいまでは頭が働くでしょうね。

確かにトラップはいくつも仕掛けてあるわよ。

でも、それは見せ罫。

いくらでも解除して頂戴。

ホンチャンはこれから始まる方なのよ♥

お馬鹿な賢者さん（笑）」

大魔王メメの創りだした別次元の意識空間を離れて人間世界。

物音に気がついて様子を見に来た城メイドが、ゲストルームに勇者と賢者がいないことに気がついた。

とかベッドごと、空間が真円型に消滅したかの如く・・・無い！

テナヤワンヤと城中が騒いだが、それ以上のことは何もなかった。

勇者と賢者がベッドごと消えた・・・。

それ以外は何も・・・。

その数時間後、魔界のちょうど中心に位置する大魔王の城。その最下層にある地下牢で

タルスは目を覚ました。

明らかに体が重い。

意識も明瞭とはとても言えない。

深く眠った所に、急に叩き起こされたような感覚。

腕は上がらない。

足も。

「(いかん。悪酔いしたっぽい。

昨夜は安酒ばかりだったからな。

亡ぼされたばかりの国じゃ、しようがないか。

あれ？ 俺の膝、・・・曲がってる？

ベッドのへりから足が落ちているのか？

っていうか、裸で寝たっけ？

今俺・・・裸だよな)」

そう思って顔を上げようとする。

首と腰、そして腕と膝、足首に何かが嵌っている。

硬い。

鉄？

いや、もっと冷たい。鋭利な冷たさを感じる。

これは拘束魔法の感触だ。

術者は冷酷なヤツだろう。

モンスターかも知れないが、人間でもこのぐらい冷酷なヤツはいる。

(※魔法には術者の性格と品位が大きく関わる。

故に魔法は、術者の本質が見えてしまう)

「(どちらにせよ、今俺は・・・素っ裸で捕縛されているってことか)」

タルスはそう考えて、魔法解除の呪文を唱えた。

全ての魔法を解除する魔法だ。

タルスよりも魔力で劣る術者であれば、魔法はすぐさま解除される。

逆に相手の魔力がこちらよりも上だと魔法は解除されない。

タルスの唱えたそれは、魔法解除の呪文であるとともに、相手との魔力のレベルの差を知るための魔法でもあるのだ。

腰を拘束する魔法は解除できた！

しかし、それ以外は・・・解除できていない。

空中に背中だけ支えなく吊られる格好になったタルスは、歯を食い縛った。

「(相手は複数！ その中でも最低でも一人っ！

俺より魔力が上のヤツがいる！)」

「あらあら、ニニの拘束魔法だけ解けちゃった♪

魔法が苦手な方とはいえ、大魔王の魔法を解除するなんて・・・流石ですね勇者さま♥

「いいんだよ！ アタシはっ！

武闘派なの！ 魔闘気バリバリで戦うタイプなのっ！
大体魔法はメメの担当だろ？

なんでアタシに！ それも腰だけ拘束魔法なんて使わせたんだよ！」
「え？」

だって勇者さまの実力を知りたかったし〜」

「ふぎゅ〜っ！！！」

それじゃあ、アタシも試すことになるだろっ！

むぎゅ〜っ！！！！」

タルスの瞳に女の子が二人映る。

強さなど微塵も感じさせない背丈。

成長を忘れてしまったかのような肢体。

しかしそれでも・・・強く、圧倒的に強く香る柔らかな女の子の香り。

これだけ芳醇な女の子の香りに包まれているにも関わらず、頭に角がある。

魔族の中でも最高位の貴族にしか生えないはずの角が・・・。

そして特別地位の高い女性しか身に付けることが許されないゴスロリ服。

すぐにタルスは目で二人の実力を探った。

魔力と魔闘気の潜在量は、魔王たちよりも・・・上っ！

つまり、今まで戦った誰よりも強い。

強いが、勝てないとは思わない。

相性次第だが、逃げ出すことぐらいは確実に出来るだろう。

細かく見れば・・・魔力は敬語を使う方の女の子には勝てそうにない。

肉弾戦なら確実に勝てるだろう。

1対1の肉弾戦に持ち込こんだ時点で、こっちの勝ちだ。

乱暴な言葉遣いの方は、魔闘気の量が半端ではない。

あの身体のどこにこんなとんでもない魔闘気量を内蔵してるのかと思うレベルだ。

だがこっちは魔法戦に持ち込めば、勝機はある。

絶対に勝てない相手ではない。

むしろ似たタイプ故に、乱暴な言葉遣いの女の子の方がタルスにとっては戦いやすいだろう。

闘気を最大出力にすれば、この拘束魔法も碎ける。

2対1ということを考えれば逃げることに専念すべき！

ここで勝つことが最終目標じゃない。

大魔王を打ち倒して、世界に平和をもたらすのが・・・自分の最終目標、責務だ！

「その大魔王が・・・ここにいないとしたら？」

「そうだぜ？」

戦っちゃうだろ？」

なあ、人間の勇者さま♪」

「っ！？」

「はじめまして。

人間界最強の勇者、タルス様。

私は、大魔王のメメと申します。

こっちは同じく大魔王のニニ。

貴方の宿敵。

殺すべき相手。

人間の全ての諸悪の根源。

魔界を統べる者。

お近づきの印に一つ私たちの能力を教えて差し上げます。

私たちね。

生まれつき他人の心が読めるの。

なるほど、やっぱり勇者さまも私たち相手なら、『勝てない相手では無い』と思いますか？

うんうん♪

その分析は私たちと同じです♥」

「そこでだ！

アタシたちは策を弄する事にした！」

「・・・策・・・だと・・・？」

「そ。

勇者さまはフィアンセがいるよな？」

「・・・」

「アーリアさんでしたっけ？」

私たち、彼女を捕まえて拘束してあるんです。

見ます？

見ても良いですよ」

「おお！ そうだそうだ！

心配してるだろうし、見せてやろうぜ。

勇者さまも見たいだろ？」

そう言うとニニは、ニヤッと笑って右手を空中で払った。

やや離れた床に浮かび上がる紋様。
紋様の中からせり上がってくる十字架。
十字架にはアリアアの肉体が磔られていた。
薄暗いこの地下牢でもハッキリと分かる。
アリアアの意識は・・・無い。

「(ここではないどこかに閉じ込められたか)」

「もうお分かりですね？ 勇者さま。」

貴方を縛るその拘束魔法。

故意にしろ、過失にしろ一つでも壊したら・・・あの女の体を滅します。

肉体を失った意識は亡霊となり、人を恨む化け物になるだけ。

アリアアさんをそうしたいですか？」

「・・・ぐっ！ 卑怯な！」

「そりゃそうだよ。」

大魔王だもん。

っていうか、今からアタシたちがお前に色々Hなことをするけど、抵抗したり、暴れたりしてもあの女は殺すからな？」

「・・・ぐっ・・・ぐうっ！！！」

「そういうわけで勇者さま♥

私たち、とっつってもお腹が空いています！

だから貴方のことを食べちゃっても・・・いいですよね？」

「なっ！！！」

「大丈夫だよ。」

噛み付いて肉を喰うわけじゃない。

死ぬまで精液を搾るだけさ。

ちよろいだろ？」

「アリアアは・・・？」

アリアアはどうするつもりだっ！？」

「うん。」

じゃあ、こうしましょう！

今から勇者さまが1回射精する毎にレベルを「1」下げる魔法をかけて差し上げますわ。

所謂『レベルドレイン』です♥

その代わり、私たち大魔王がお腹いっぱいになるまで、勇者さまが精液を提供してください。さった時点でアリアアさんは生きたまま開放して差し上げます♥」

「約束は・・・守るな？」

「あ、先に言っておくが、勇者はダメだからな。」

死んでも開放しないぞ？

死んだら、モンスターに転生させて搾精奴隷に仕立てるんだから！
でもあの女は、意識を戻して人間界に放してやる。

約束だっ！」

「・・・」

タルスは大魔王の言葉をそのまま信じるほど馬鹿ではない。

しかし、その言葉にすぎるしか無かった。

否、タルスはその言葉を信じきっているふりをして時間稼ぎをしようと思っていた。

アリアアさえ意識を取り戻せば、逃げる事が出来るからだ。

アリアアさえ意識を取り戻せば・・・。

・・・そこまで考えてタルスは考えるのをやめた。

「そうですよ。考えての行動では、私たちに一手遅れて行動することになります。
考えずに行動できないと・・・」

「約束を守らないこと前提だなんて。」

ヒドイ奴だな、タルスは。

でもお陰で本心が分かっちゃったな。

アリアアの拘束はしっかりとしておかないと。

抜け出されたら、タルスごと逃げられちゃうってことだからな！」

「・・・くそ・・・」

「うふふ ♡」

私たちが約束を守らないなんて、考えた罰を与えなくちゃ ♡ ♡

コレ・・・勇者さまは好き？」

「あっ！」

エネマギユラっ！

それ、アタシが魔導師たちに開発させてたやつだぞ！

アタシの部屋からくすねてきただろ！」

「エネ・・・マギユラ・・・？」

白いうねうねした形状の棒に、輪っかの取っ掛かりが付いたアイテムをメメがちらつかせる。

初心なタルスには、それがなんだか知らない。

「これは人間界でいうところの、エネマグラですわ。

もつとも魔界では高貴で可愛らしく『エネマギユラ』と呼んでいますけどね。

人間界のエネマグラと違って、中から勃起を強烈に促すコエンドロの抽出物が染み出てくるように改良されたものですけど♥」

「凄いだろ？」

これをグリグリケツに突っ込まれたら、どんなに勃起したくないって思ってもギンギンに勃起しちゃうんだぜ？」

「ま・・・まさか・・・それを・・・入れ・・・入れ・・・」

「そ♪」

タルスのケツに突っ込む！

人間は、闘気を練る点穴『ムラダーラ』がケツ穴の奥にあるからな。

闘気バリバリの戦士タイプは余計に気持ちいいぞ？

闘気がデカイ分、普通の奴より敏感に感じちゃうし♥」

魔王ニニの言葉に嘘はない。

人間には幾つか闘気を練る点穴がある。

みぞおちや眉間など身体の正中線上の表面にその多くがあるが、体内にもある。

その一つが、直腸内の点穴『ムラダーラ』。

特に闘気で戦うタイプ、タルスのような人間にとっては、点穴は重要極まりない。

タルス自身、『ムラダーラ』が闘気の量に比例して、気持ち良さを呼び起こすことに薄々気がついていた。

「ケツ穴に突っ込まれて、感じちゃったら恥ずかしいよな？」

だって男の癖に、喘いちゃうんだぜ？

ん〜？

勇者が魔王のおもちやで、感じちゃうなんて、絶対にフィアンセには見られたくないよな？」

「ぐっ・・・ぐっ！！！」

「クスクス。」

顔真っ赤ですよ？

じゃあ、差し込みますね♥」

メメはタルスのア〇ルを指で探ると、軽く人差し指の先でア〇ルのシワを擦った。自然とタルスの顎が跳ね上がる。

顎が跳ね上がった瞬間、無意識の内に鼻から一気に空気が入ってきて肺が痛い。

なぜか今吸い込んだはずの空気が吐けないからだ。

タルスは、自分でも気がついていなかったが、ビビっていたのだ。

ア〇ルにエネマギュラが押し込まれる際の痛みに・・・。

そして、今自分が置かれている、どうしようもない圧倒的な窮地に……。

「ぐ……あっ……はひい……ふぎゅうっ……」

「あはぁ♥ 入っちゃった♥

お尻の穴に、おもちやが入っちゃいましたよ？

殲滅の勇者さま♥♥」

「ふっ。クスクス。

どうしたよ。

なんでそんなに悔しそうな顔してんだ？

なあ？

殲滅の勇者さま（笑）。

あれか？

ちよつとだけ弄ってやろうか？

ちよつとだけな♪」

ニニはそう言うと、エネマギユラの足部分にある輪っかに指を通し、くいくいっと軽く動かした。

するとまるでバイブ機能でもあるかのごとくエネマギユラがタルスのア〇ルの中で暴れ回る。

「ひっ！

……っ……！

んんん！！！！！！

ふえっ！ ふうっ！ ふぎっ！

エネマギユラから一気にコエンドロの抽出物が溢れ出し、直腸が歓喜して暴れだしたのだ。

そして、その動きは止むことがない。

その快感に戸惑ったタルスはとても屈強な男とは思えないほど、……まるで初心な女が初めて膣に指を入れたかのような喘ぎ声を上げてしまった。

自分の喘ぎ声に驚いて目を開くと、そこには二人の女の子。

二人ともニヤついた顔でこちらを覗きこんでいる。

「（見られてしまった！

喘いでいる姿を！

挿入された瞬間の顔をっ！）」

タルスは慌てて瞳を強くつぶって、これ以上大魔王のニヤつく顔を見ないようにした。しかし腕は上げられないので、耳は塞げない。彼女たちのクスクスという漏れ笑いはどうしても脳に届く。魂に刻まれる。恥辱の嘲笑が……。

「クスクス。

ア○ル処女だったんだな（笑）。

うわー、すっごい悔しそうな顔してるっ！

勇者なのに、大魔王にア○ルいじられて、相当悔しいんだろうけどさ。

催淫効果抜群の、コエンドロの抽出物を直腸にダイレクトで入れられたら……。

感じないわけにはいかないよな（笑）。

そのうち、バイアギュラが前立腺の場所を見つけたら、もっと感じちゃうぜ？

前立腺を捉えたら、女の子の快感がもっともっと強く押し寄せてくるんだ。

お！

おおっ！！！！」

「あらあら♥

勃起……しちゃいましたね？

勇者さま、分かります？

ご自身のおチ○ポがギンギンに勃起してる感じ……。

もうこの勃起は収まりませんよ？

だ・か・ら・……♥♥♥

このまま私たちに身を任せましょう？」

「だっ……誰がっ……お前らなんかに！！！！」

ギンギンに勃起したおチ○ポの亀頭から我慢汁を垂らしながらタルスは大魔王を睨み、反抗の意思を示した。

もしもタルスの相手がもう少し器の小さな相手なら、この場でタルスを殺しただろう。その方がタルスにとっても楽だったかもしれない。

しかし相手は、大魔王。

この程度の反抗は、日常茶飯事。

反抗者はうっすらと薄い膜で包み込んで、蕩めかすぐらいでなければ、大魔王ではいられない。

「そんな態度をとっても勃起してるじゃないですか。

もうこうなったら、射精しないと収まりませんよ？
どうします？

1回射精しておきますか？
それとも、このまま射精しないで我慢し続けてみますか？」

「おお♥
それいいな！
おい、勇者！

このまま射精しないように我慢しろよ？
出したら、約束通りレベルドレインだからな？

アタシたちが満足するまで射精するか、アタシたちがギブアップするまで射精を我慢しろ。

分かったな？」

「な・・・なんでそんなこと・・・っ！！！」

「嫌でも拒否権なんて勇者様にはありませんよ？」

だって、私たちには賢者アリアの肉体と意識があるんだもの。

勇者さまは逆らえないんです。

悔しくても、絶対にね」

メメはそう言うと、小指の腹をタルスの亀頭の先にチョンと付けて、つつつと下に向かって撫でてゆく。

「ふひいいいっ！！！」

「クスクス。

メメの言う通りだぞ？

自分の立場が分かったか？

じゃあ、早速だけど『一回イかせて下さい、大魔王さま♥』って言ってみようか？

可愛くおねだりしろよ？

可愛くな(笑)」

タルスは「ふざけるな！」と叫んで、闘気を全開にし、拘束魔法を解こうと思った。

まずは右にいるニニの頬を殴りつけ、すぐさまメメも顔面を殴りつけようと一瞬だけ頭の中でイメージした。

それは、あまりにムカついたが決して行動には移せないという状況下で、せめてイメージの中だけでも大魔王を殴りつけてストレスを溜めないようにしようとする、いわば人間の本能だったのだが・・・。

心の声が読める大魔王の二人にとっては、『反抗の意志あり』としか捉えられなかった。

「まったく、器の小さい生き物ね」

「ああ。」

「これはお仕置が必要だな！」

「そうね。」

死ぬほど射精してがっつりレベルを下げておくべきだわ。

私たちを殴るイメージなんか持てないぐらいにがっつりとね・・・っ！」

大魔王の小さな口が2つ同時にタルスの亀頭に近づく。

大魔王の口よりも遥かに大きなタルスの亀頭は、ブザマにビクビクと震えていた。まるで捕食者に追い詰められて怯える小動物のように・・・。

そして、唾液たっぷりの暖かな女の子の口の中に、タルスの肉棒の一部が収まる。

亀頭の右部分は、ニニが。

亀頭の左部分は、メメが啞えた。

「ひっ！」

熱ささえ感じるほどの暖かさと、粘着感さえ感じる程ねっとり絡みつく大魔王の唾液。そしてザラついて絡みつくニニの舌触りと、すべすべで滑りの良いメメの舌触り。左右同時に、違う感触がタルスの感覚を満たす。

「んひいいいっ！！！！！！」

たったこれだけで・・・。

舌が亀頭に絡みついただけで・・・タルスはイッてしまった。

精液が激しく飛び散って、空中を舞う。

「(そんな・・・、今・・・俺・・・大魔王の舌で・・・啞えられただけで・・・)」
「だっさ。」

コイツ、マジで殲滅の勇者？

舌が触れただけで、マジイキシやがった(笑)。

人間界最強の勇者は超早漏だな？」

「くっ！ くっ！ 違う！ 違うんだっ！！！！」

「ウフフフ。」

怒っているみたいですけど、私たちには全部バレていますよ？

快楽を味わう暇もなく、一気にイってしまったから、自分が『射精した』って自覚があんまり無いんですね？

さて・・・そんなもったいない1発目でも射精は射精。

レベルドレイン始めます(笑)」

「おお、行ったら行ったら(笑)」

メメが指を空中に払う。

すると、紋様が浮かんで中から触手が現れた。

その触手は、タルスの精液を絡めとってゆく。

その瞬間、タルスは間違いなく感じた。

体力がぐんっと下がったことを。

射精した直後に来る疲労感とは明らかに違う、根本的な身体感覚。

久しぶりにスポーツをしたら、思うように身体が動かなかった感覚に近い。

更に魔力も衰えたことが自分でも分かった。

最大魔力と最大闘気の上限が下がったのだ。

「(ほんの少し成長するだけでも、あんなに苦労したのに・・・)」

タルスは寂しさのようなものを感じながら、触手が紋様とともに消えてゆくのを見つめていた。

そして紋様が完全に消えた瞬間、アリアと目があつた・・・ような気がした。

今彼女には意識が無いはずだと分かっているながらも、なんとも言えない申し訳無さが込み上げてくる。

自分の強さは、アリアとともに培ったのだという意識が、頭のどこかにあつただろう。

共に戦ったことを軽視して、射精してしまったような・・・、なんとも言えない申し訳無さ。

恥ずかしくて、寂しくて・・・辛かった。

そんなタルスの心を、すぐさま次の快楽の波が溺れさせる。

アールの中で暴れまわるエネマギユラがついに、タルスの前立腺を捉えたのだ。

意志持たぬ玩具のはずのエネマギユラは、自身の出っ張り前立腺を見つけると、そこをしつこくしつこく何度もノックした。

直腸が歓喜して暴れまわるたびにノックの強さが変わる。

「あ・・・つぶひいつ！ ふ・・・ふぎひいつ！！！！」

「我慢してる♪ 我慢してる♪」

誰も何もしなくても勝手に暴れまわるエネマギユラが、勇者さまの恥ずかしい部分をうずかせてくれるでしょう？

もっともっと、射精しましょうね♥️」

「これで分かったか？

タルスは、射精を我慢しながらアタシたちの搾精を受け入れるしか無いんだよ。

しかも射精して、一瞬だけ賢者タイムでレベルが下がったことを後悔したら、すぐさま次の射精のために、また感じ始めちゃう！

さくて、立場が明確になった所で、次はどうしようっかな〜♥️」

「タマを舐めて差し上げます。

このキン〇マには頑張ってもらわないといけないし♥️

次こそ『殲滅の勇者』の名にかけて、最後まで我慢してくださいね？」

「クスクス。

脚がガクガクいつてんぞ？

どうした？

感じすぎて、身体に力が入らないか？

それって超ヤヴァいんじゃない？

腰の部分の拘束魔法は無いんだから、しっかり腹筋に力を入れないと、首の骨が折れちゃうぞ♥️」

やうぞ♥️」

「むぐっ！ あはあああっ！」

既にタマをしやぶり始めたメメに続いて、ニニは亀頭に舌を伸ばした。

先っちょだけが亀頭に触れているのに、異様にザラつく舌の感触がタルスの脳髓を支配する。

ニニの舌が離れると今度は、タマを転がすメメの舌の上品な感じがたまらなく愛おしく感じてしまう。まるで高嶺の花の女性に奉仕してもらっているような、そんな感覚が……。



「とんでもなく気持ちいいだろ？
自分が一生をかけて練り上げた実力を代価に射精しちゃう・・・直前のフェラは・・・。
アタシのザラつく舌の感覚が頭ン中を支配してるの、アタシたちにも伝わってくんぞ？
あ、また射精しそうになってんだろ！」

「くっ……くっ……」

いくら……貴様らが勃起を嘲笑っても……

これは薬物での勃起なんだから……

……心までは……

……心までは操れない!!!

くっ……くはははははっ!

ザマアミロっ!!!

くははははははははははっ!!!!!!

「……」

「……なるほどね。」

確かに、勃起しているからって心からの射精とは言えないわね」

「だったら……、屈服させるしか無いな。」

心を屈服させて、自分から『大魔王さまの為に射精したい』って思わせる!」

「……どうやって?」

「メメ、知ってるか?」

人間の男ってな、あんまり気持ち良いと理性よりも依存心が強くなるらしいぞ。

セックス依存症って呼ぶんだって!」

「ふくん。それで?」

「簡単じゃなか。」

アタシたちの中に射精させちゃおうぜ。

コイツの心が屈服するまで……何回でも……何回でも……♥」

『大魔王のマ○コ限定中出し依存症』?

……素敵♥♥♥」

「くっ……」

「じゃあ、そういうことで!」

次は、アタシたちのマ○コんにダイレクト射精してもらおっかな!」

「そうね。」

「試してみましょ♥」

「だろ?」

「じゃ、そういうことだから勇者さま。」

腰踏ん張ってくれ!

アタシが乗るからよ」

「ふひい! やめろ! やめろおおお!!!!」

「うふふ。ニニの次は私ですよ?」

ほくら、大魔王のおマ○コは暖かいですよ♥」